

ちよつと危ない色艶都々逸
笑って許して！ Part5

短冊本



ゆうほ

あなたに惚れた
わたしの心
隠して君に
探してと

ゆうほ



言葉はまごま

違っている

愛と恋だけ

分かるよな

ゆうほ



人を裏切る 心の弱さ

今度は自分が裏切られ

さくら

惚れたあなたのに裏切りならば
せめて知らずに過ぎたい

ゆうほ



桜花見て
賑わうけれど
あたしや主だけ
見られたい
ゆうほ



八百長相撲で

やめさらされて

今度はプロレス

おてのもの

ゆうほ



手造り料理を

あげたいお方

さてはあたしも

惚れたよう

ゆうほ



夢と希望を
託した藩が
それがこれでも
戻れない

ゆうほ



過去の小骨を

呑み下そうと

そのたび痛み

身をよじる

ゆうほ



ひと目忍んだ
逢瀬の為に
逢えば燃えるが

まわり周
ゆうほ



おまえの尻は

赤いと罵声

猿も欲

しいさ

ボスの椅子

ゆうほ



いつのまにやら
わたしの心
惚れたあなたが
居座って
ゆうほ



笑おと後こと
空蟬ならば
悔いを残して
何とする

ゆうほ



位く位く譲った 大事なおひと
粗末にしては 許しません

さくら

あたしや形見の 着物のような
主が着なけりや 似合わない

ゆうほ



「ネエ子ヤン綺麗
だが妻じゃない」
もてる苦勞も

世界級

…尖閣諸島

ゆうほ



そやけどちよつと 話が違ふ

お金はないし 家もない

さくら

あなたいたなら 充分ですと

言った口から 金の事

ゆうほ



「久しぶりだな」
出会った二人
名前浮かばず
「それじゃ又」

ゆうほ



寒いと国で

離さぬ君は

夏にはなんと

いうのやら

ゆうほ



好かぬお方の
ラブメールより
好いた名前を
見ていたい
ゆうほ



デモを止めよと
網の目絞る
どうせネットじや

水こぼれ
ゆうほ



浮気で亭主に

惚れたたというの

鬘斗と借金

つけてやる

ゆうほ



飲んだ事ない 悲しい酒を
一度だけ飲み 泣きくずれ
ふたりして飲みや 悲しい酒の
酔いと涙も 振りわけて
ゆうほ



古女房の

おまえと俺は

愛の一字

書ききれぬ

ゆうほ



お前はいつも 笑っているが

困ったことなど あるのかな

さくら

困りごとなら 胸一杯で

笑うことなら 山ほどに

ゆうほ



つれないおまえの

気を惹く為にや

餌とよいさお

かけひきか

ゆうほ



泣いたカラスが もう笑ってる
一緒に酒でも 呑みましょか
さくら

泣いて気を惹く おまえの癖は
知らぬふりして 慰める

ゆうほ



使えるものを

エコで

買い替え

何がエコだか
無駄なのか

のか
ゆうほ



池に移った

月取れないか

濡れてみなければ

わからぬや

ゆうほ



皆で働き

皆で貧乏

果ては皆で

ホームレス

ゆうほ



夢は見るもの
進いかけるもの
惚れたあなたと
似ているな
ゆうほ



「好き」の寝言に
寝顔をみつめ
唇合わせ
「好き」をのむ

ゆうほ



松は角刈り

わたしを待って

天が届けた

綿帽子

ゆうほ



あんたが大將 男やないか
なんべん言ってる 同じこと

さくら

わたしは大將 あなたはオカミ
今じゃカミサマ 言うとおりの

ゆうほ



すねて喋らぬ

おまえの手口

分かっていても

根負けし

ゆうほ



わが子重いと

恨んだことも

交てば心配

母ごころ

ゆうほ



それでいいのだ 人生なんて

四角四面じゃ 角がたつ

さくら

角が立ってる わたしだけれど

夫婦なるときゃ 角隠し

ゆうほ



もう一回と

泣いて

せがまれ
無理にさしたの

挟み将棋

ゆうほ



ヨイシヨとわかって 乗ってはいるが
毎度じゃちよつと バカみたい

さくら

君をかっいで 浮世の闇も

笑っていいこう 夫婦道

ゆうほ



昼はグルメで

贅沢をして

夜は夫と

ダイエツト

ゆうほ



一緒になるときや

「離しはしない」

今じゃ女房

「話さない」

ゆうほ



さつき別れた
君もう泣くか
雲が教える

涙雨

ゆうほ



箆笥

長持

祝の席で

人には見せぬ

秘めごとと絵

りーべ



わたしの蝶は
あなただけなの
他にやらない

甘い密
リーズ



龍の鉤爪
解かねばならぬ
仏の国の
わが山野



つぼみなりやこそ

想いは膨れ

咲けば萎むか

見ぬが花

ゆうほ



うなじにかかると
あなたのお息

裾が乱れる
緋縮緬

膝を団じてる
つもりの裾は

乱れ緋色の
湯文字だけ

さくら
ゆうほ



あなたの過去など

知りたくない

言っ

て携
帯
子
エ
ッ
ク
す
る

ゆうほ



一夜妻でも命をかけて

愛した証しがほしいのよ

さくら

ひと夜使ったひとつの枕

ふたり愛知る夢枕

ゆうほ



六十年目の
同窓会は

話弾んで

噛みあわず

ゆうほ



別れたお人によく似たお客

今夜も会えるか 春の月

さくら

何年振りかに 出会えたあなた

逢わにやよかつた 君消える

ゆうほ



キャリアアウーマン

女か母か

どちらに戻る

悩む五時

ゆうほ



待つて待つて待ちくたびれて

やっと思いがかなう夜

さくら

思いの丈をあなたにぶつけ

ふとみりやそこがまたおもい

ゆうほ



雁は飛んでく

山川万里

恋しわが君

探すよに

ゆうほ



桜ひとひら

唇に落ち

「好き」と一緒に

くちう

つし

ゆうほ



昨夜亭主が

ねどこであばれ

あれは鯰か

今日地震

…東北地方太平洋沖地震
お見舞い申し上げます

ゆうほ



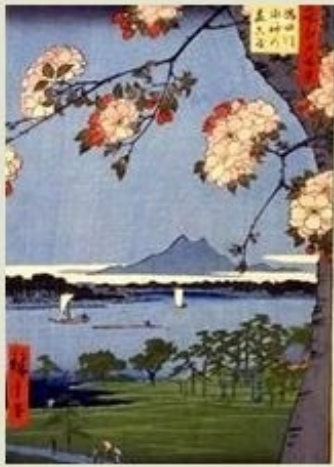
地震ある国

しかたはないが

せめて心は

揺らさずに

ゆうほ



津波きたなら
速めに逃げて
恋の津波に
溺れたい
ゆうほ



こんな時こそ
情けがしみる
今夜はおでんに
いかそうか
ゆうほ



もう一回と

言われりやするが

待って！死ぬ！駄目！

言わぬ暮を

ゆうほ



青春時代の

あのひとコマで

動く自分は

三日前

ゆうほ



見上げる空に
霞んだ月は
君の泣き顔
菜種月
ゆうほ



車使わず

歩いてエコで

何故に減税

ないのやら

ゆうほ



黒髪なでて

体をつつむ

春の目ざめを

風さそろう

ゆうほ



こぼさず猪口に 酒受けられぬ
ぬしがさしたら うまく受け

リーベ

君の煽した この暖かさ
まぶた閉じれば 肌のあじ

ゆうほ



帰らないでと
泣く人残し
夜道の先にや

山の神

リーベ



自然の前には 人間なんて

なんと小さな 生き物か

さくら

人間よりも 小さなありが

じようずに暮らす あり社会

ゆうほ



わたしはあなたの
ものなのだけど
あなたわたしの
ものじゃない
ゆうほ



この頃やっと 分かったけれど

人間大地を 借りている

さくら

生きていくには すべてがあるに

なおも欲しがる この浮世

ゆうほ

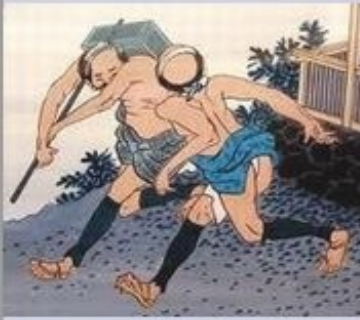


火宅だけなら
まだ良いわいな
火の車さえ
いつもある

ゆうほ



健康ジムまで
車で行って
室内マラソン
何の為
ゆうほ



氣づかいすぎて
好きだと言えぬ
そんな私は
ふられやく
ゆうほ



義理子ヨコ貫い

義理より高い

ものせにや済まぬ

ホワイトデー

ゆうほ



義理とふんどし

かいてはならぬ

男まえまで

たたぬ道

ゆうほ



いつもあなたを
たててるわたし
妻のかがみで
夜はねる

ゆうほ



忘れる間もなく すぐやってくる

自然災害 恐ろしい

さくら

天災起る しかたはないが

人災起る 人による

ゆうほ



天災人災 いろいろあるが

うちの愚妻も ちと怖い

さくら

馬鹿な判断 災いおこり

愚かなしまつ 愚災かな

ゆうほ



知識あっても

智慧なきやゴミ

その智慧あれば

おれは釈迦

ゆうほ



風の吹くまま 雨降るままに
これが一番 楽ですよ

さくら

藁の帽子に ぼろ服まとい
おまえ見守る おい案山子

ゆうほ



こんな時こそ
寄り添い生きよ
人肌ほっと
日が昇る

ゆうほ



たまには自分の 向きたい方に
向いて見たいと 思うでしよ?

さくら

顔はおまえに 目はあの女
心飛んでる 赤とんぼ

ゆうほ



亭主そば打ち

世辞でも言えぬ

「ほんにおまえの

そばがよい」

ゆうほ



酒も煙草も

博打もやめた

もひとつやめりや

ほどけさす

ゆうほ



デモとめ黙禱

ろうそく灯す

心おなじと

クロアチア

ゆうほ



駅のホームレス
帰宅もできぬ
人に差し出す

段ボール

ゆうほ



我が家トイレを
使ってくれと
紙に書き持つ
ひとなさけ

ゆうほ



太っ腹だと 喜べないよ

メタボ検診 引っかかり

さくら

人の勝手な 言い分訊けば

憑き神たちも しつぽまく

ゆうほ



逢えない気持ち
煙草でかくしや
けむり目にしむ

なみだあめ

ゆうほ



ぬしは三味線 わたしは笛よ
卯月の寝屋の花模様

リーベ

君が笛吹きや 背筋も伸びて
くち三味線の したがまう

ゆうほ



全てを捨てて
飛んでく雁は
おれが飛べない
わけ残す
ゆうほ



夜になつたら

オイラのまわり
ア／＼ラ！シヤツチヨウサンと
メタボもて

ゆうほ



俺は恋した
君には言わぬ
むかしの写真
見返して

ゆうほ



かえるメールの
返事がこれか

まだケッコウよ!

モウケッコウ

ゆうほ



用もないのに
今日から携帯
うちの主人と
書いてだす

ゆうほ



ちよつと苦味が あるのがいいわ
あなたによく似た 落の臺

さくら

刺激じやまけない おいらだけれど
ちよと小さい とうがらし

ゆうほ



「パパは大好き！」
娘に言われ
今は夜飛ぶ

蝶が言う

ゆうほ



苦味ばしつた いい男だと

ほめたらたいへん 真に受けて

さくら

にがみがぬけた にがうりなのね

顔さえ似てきた 瓜の蔓

ゆうほ



恋の仇に
勝ったがために
今は悔まにや
ならぬとは

ゆうほ



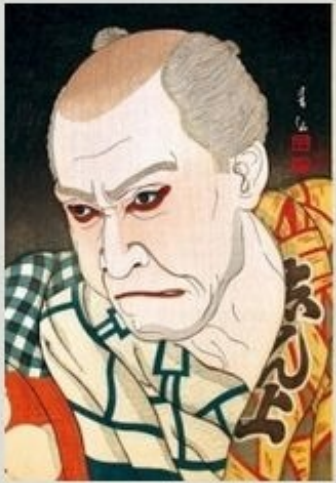
あれから食べてる 落みそ茶漬け
だけどほんとに おいしいね
さくら

野原で摘んだ つくしで茶漬け
夜もあなたに つくししたい
ゆうほ



むかしやすっぱん
まむしといわれ
いまじゃ家いる
おじやまむし

ゆうほ



意地を張らずに 帰っておいで
裏木戸いつも 開けとくよ

さくら

両手あげたら 男がすたる
裏木戸通って 忍び足

ゆうほ



医者と妻とが

ひそひそ話

浮気話の

ほうが良い

ゆうほ



死ぬほど辛いわ
死ぬほどいいわ
あなたいいわ
りゃこそ
云えること
リーブ



ひとりでも 美味しくもないよ
やっぱりお前が一番だ

さくら

美味しい酒は ふたりで分けて
苦勞はひとりで 飲みほすさ

ゆうほ



たまに見目良い
女になびく
おまえ
芯ない
枯れすすき

ゆうほ



小唄端唄の ひとつもなしに
いきなりあれとは なんじやいな
さくら

おれが得意な 横笛吹いて
音色艶でりや はじめるか
ゆうほ



玄関あけて

娘の声が

「パパはいる？」かに

妻「いらぬ」

ゆうほ



またまたその手で ごまかしたって
すねてはみたが 乗っている
さくら
その手でまたは うれしいような
こばんでみても 乗っている
ゆうほ



めおと温泉

背中を流し

ストレス愚痴も

流しあう

ゆうほ



喧嘩別れは 淋しいものよ

話せば分かる 春の雪

さくら

喧嘩しながら きっかけ探し

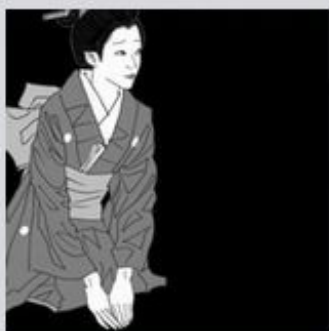
どこで頭を 下げようか

ゆうほ



赤の他人が
恋人になり
家内歳とりや
おっかない

ゆうほ



花見酒にはたまには酔うが

手練手管にや すぐ酔うわ

リーベ

君の香りに つい誘われて

酒が背を押す 花見酒

ゆうほ



地震天災予兆がないの

ぬしの訪れもつとない

リーベ

君の心を地震の様に

ゆさぶり壊し抱きしめる

ゆうほ



生きてりやなんとかなるもんだよと
お天とさまの 声がする さくら
生きていりやこそ おまえに会えた
それで人生 悔いはない

ゆうほ



水もやらぬに
うわさの木の
根も葉もなく
花が咲く

ゆうほ



いつまでたっても 心の底に

あなたが住んでる 春の月

さくら

悟空毛を吹きや 分身つくる

禿のおいらにや 無理な事

ゆうほ



あたしや毎朝
ゴミ出すけれど
夕暮れ飯時
もどるゴミ
ゆうほ



出来るよやれるよ みんなでやれば
今こそ見せよう 底力 さくら
信じてやろうぜ みんなの事を
俺も信じて ついでだよ ゆうほ



見ざる聞かざる
また逆らわず
いつも笑顔で

後わず

ゆうほ



世界のみんなが 祈ってくれる

自信を持とう 日本人

さくら

肌は違うが 心は同じ

情け通じる 地球上

ゆうほ



「あなた」と呼ばれ
ときめいた胸
今じゃ
動悸が
するよな
ゆうほ



この災害は つらすぎるけど

世界の手本だ 日本人

苦ありや楽ある チャンスもあるさ

夢もあるのさ なせば成る

さくら

ゆうほ



二度と吞まない
この二日酔い
夕暮れ時に
何故なおる

ゆうほ



被災したのは

わが子と妻と

思い不自由

我慢する

ゆうほ



泣いてるのは わたくしですが
泣かせたあなたは 憎いひと

さくら

涙ころの 雨ゆえきつと
恨みとけてか しよっぱいか

ゆうほ



三歩下がって

歩いた妻が

今はオイラが

三歩下げ

ゆうほ



恨みますまいいとしいひとの
面影抱いて 吞んでます
猪口に映ったいとしいひとを
一気呑んだら 燃える夜

さくら

ゆうほ



金は天下の
廻りものだよ
言うけどうち
番外地

ゆうほ



比べちやあかんよ みじめになるよ

それぞれいいところ あるやろう

さくら

口鼻ひとつ 目と耳二つ

数は合うのに 何故違う

ゆうほ



家の仕切りは

むかしは俺で

妻にとられて

いま孫さ

ゆうほ



妻とのスカイプ

タダだと言うが

繋ぐのいつも

俺からさ

ゆうほ



じらさずさしな

男だろと

切った啖

呵で
雪隠詰

ゆうほ



あなた背中をながしましようか

馴染み浅いがいとしい背
リーベ

背中でおかふるえる手つき

そつとかさねて 震えとめ

ゆうほ



別れた女の 悪口言うな

みっともないよ 男だろ

さくら

あんな男の どこがいいのか

写真とりだし 涙する

ゆうほ



寒い夜には

おまえと添い寝

ポカポカ気分

これぞエコ

ゆうほ



一円玉でも みんなで出せば
億のお金になるからね
さくら

おまえ体を 出すとはなんだ
力も金もないなんて
ゆうほ



入れよかよそか
指先迷い
工くイままよと

貯金箱

ゆうほ



そやけどやっぱり あっちがいいよ

隣の芝生は 青いのよ

さくら

青い芝でも いつかは枯れて

禿げりや手入れも いらぬよな

ゆうほ



夫なみだで
韓ドラみるが
妻はアクビで
目になみだ

ゆうほ



必ずいい人 見つかりますよ

誰かが持ってる 合わせ具

さくら

俺に合う具 見つけにやならぬ

夜ごとでかける 潮干狩り

ゆうほ



久しぶりだね

一番するか

座布団ひきだし

おいちよカブ

ゆうほ



人の心は 移ろうものと

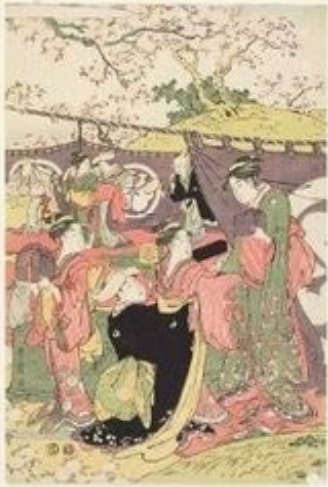
さくらの花に 教えられ

さくら

散らせたくない 桜は散って

心の憂さは 散りもせず

ゆうほ



だま
つて
させ
れば
しも
びし
よ濡
れよ
かわ
い
いむ
すこ
と

水あそび

ゆうほ



貴方専用 その他大勢

恋の仕分けは 着メロで

リーベ

ゆうべ乱れた 仕草をまねて

からだ震わし 呼ぶ電話

ゆうほ



暗く沈んだ
やまとの国に

光きらめく

和の心

ゆうほ



器用貧乏 損するばかり

ばかとはさみは 使いよう

さくら

あなた次第で 切れたりするわ

下手に使えば 血をみるさ

ゆうほ



夢に出てくる

見目良い女

あなた起きてと

見りやかかあ

ゆうほ



ゆうべあんなに
やめてと言つて
今朝は帰るの
やめてとは
ゆうほ



玄関開けて

「今帰ったわよ！」

俺に言わずに

ポ子に言う

ゆうほ



おいらの家は
格差があると
しよんぼり囁く
妻子俺

ゆうほ



今夜時計は

あつちに置いて
夜通しよう

針仕事

ゆうほ



夜になったら
出て行き鳴いて
相手呼ぶ猫
俺と似る

ゆうほ



頭が悪くて 器量も悪い

わたしのことです

すみません

さくら

頭悪いの 承知の上で

惚れたあなたは

もっと馬鹿

ゆうほ



政治しわ寄せ
俺たちやいらぬ
しあわせくれりや
いいだけさ
ゆうほ



起こつた不幸を

手のひらすくい

きつと飛び立つ

不死鳥が

ゆうほ



おぼろおぼろに 薄れてゆくが
時々あなたの 声でする

さくら

声がしたのも あなたの影も
おもう心も おぼろ月

ゆうほ



出会った時に
見えた赤糸
今じゃりモコン
動く俺
ゆうほ



ばかに生まれて 無理せず済んだ
ばかに生まれて ありがたい

さくら

ばかとあほうで 夫婦善哉
笑うまいにち ありがたい

ゆうほ



ひとの道など
考えたとして

恋に火がつきや

とめられぬ

ゆうほ



隣のはなは

綺麗に見える

うちのはなでも

はなははな

ゆうほ



出入り激しい

この中着の

口を絞られ

もちはせぬ

ゆうほ



爺さん何だり？

おまえは誰だり？

これで平和に

日を過ごす

ゆうほ



鏡みながら

つらつら思う

あの世行っても

もてるには

リーベ



おしろい塗って
口に紅さしや

昼と夜では

ひとの顔

リーベ



あなたと寝ても 惚れてじやないよ

穴の湯たんぽ 寒い夜

遊帆

そんなに寒けりや ふとんをかけよ

わたしやあつめの 肉布団

ゆうほ



空にかみなり
ふとんにおまえ
へそした盗ろと
待ちかまえ
ゆうほ



ほのかな想いを 寄せてはいたが

口には出せない 春かすみ

さくら

しだれ桜は 咲かせた花が

おもいおもくて 枝垂れる

ゆうほ



いつも芯ない

ぐうたら亭主

いざの時だけ

いきりたつ

ゆうほ

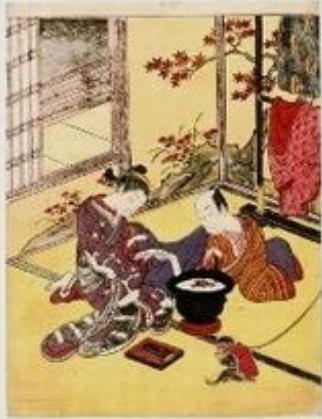


さよならいえない あなたのために
今夜は呑みましょ ラストキッス

さくら

愛していると 言うのをやめて
口で伝える ファーストキッス

ゆうほ



血のつながりの
無いのが亭主

それゆえ立てて

なだめてる

ゆうほ



さくらの花の 散らないうちに
どうして想いを 告げようか

さくら

さくら花びら 散るよな風情
ぬしに想いを 知らせたい

ゆうほ



婆と言う字を

よくよく見れば

寄る年波と

戯れる

ゆうほ



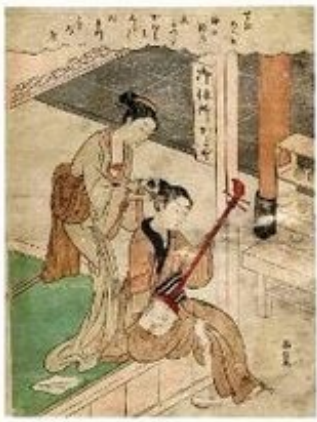
今宵清掻き

つまびく君は

音色震える

泣いてるか

ゆうほ



泥をかぶった
桜の木でも
花は満開
色つける

ゆうほ



俺とおまえの

ふたりの世界

なにはなくとも

おもいやり

ゆうほ



さくら咲くときや さくらを愛でて

あやめ咲くときや あやめなの

さくら

ぬしは蜂でも 亡八者か

さしてまわって あとしらず

ゆうほ



始末悪いが

マッチと浮気

すれば火が付き

燃え上がる

ゆうほ



あっちもこっちも お盛んだけど

あなたほんどに チューリップ

さくら

口に入れば 洋もの和もの

何でもござれ グルメ嬢

ゆうほ



「おなか減った？」と
ポ子には訊いて
俺に黙って
出すご飯

ゆうほ



そよぐ黒髪 香りをはなち

春のしらせで つくし伸び

遊帆

草むらかきわけ つくしを探す

両手添えたら そつととる

ゆうほ



肩に置いてる

その手が馬鹿よ

あたしや待ってる

どこ違う

ゆうほ



バナナに種は
あるのと訊かれ
夜に試して
みるつもり
ゆうほ



泣いて笑って 怒ってしよげて
こうして人生 過ぎて行く

さくら

愛してふられて 嫌われ愛し
離れ愛して それが愛

ゆうほ



馴染みのバーで 飲んでるあなた
カンバン前に 連れ帰る

リーベ

恋のカードも 妻の字切られ
手切れするしか ないような

ゆうほ



今更後き言 言うんじやないよ

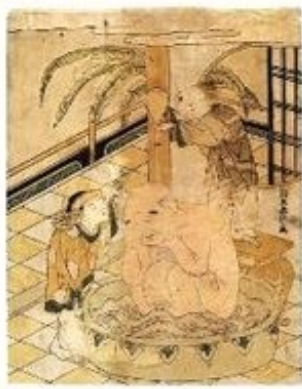
みつともないよ 知らないよ

さくら

鳥に食われる 虫さえ後かぬ

あなた弱虫 後き虫か

ゆうほ



帯に手をやり

久しぶりねと

言う唇を

かさねとく

ゆうほ



塩をかけたら 穴とびだすが
ゆつくり抜いて マテガイは
生きのいいのが 潮ふく証拠
さすときゃそつと はまぐりに

遊帆

ゆうほ



嫁と妻では
いる位置違う
妻は下から
支えてる

ゆうほ



酒を呑むのに 訳などいらぬ
呑みたいときに 呑むだけよ
恋と酒とは 訳などないさ
酔いが過ぎれば 苦しいさ
さくら
ゆうほ



妻はウイルス
犯されたよう
いつそ初期化を
してみたい
ゆうほ



わたしの想いを 知ってるくせに
わざと吹かせる 春の風

さくら

春の息吹は うずきを呼んで
濡れためしべの 花開く

ゆうほ



上を向いては

きりない暮らし

下見て咲くか

ゆりの花

ゆうほ



こんな優しい
あなたの
胸の笑顔
には
別の君
リズム



あなたがそのまま 心の中に
ずっと住んでる 春の夜

さくら

家賃も払わず 居座りつづけ
大家を泣かす 憎い奴

ゆうほ



君は可憐な

花咲かすのに

毒を隠した

トリカブト

ゆうほ



泣いて縫った お前を捨てた

これが報いか 深い罫

さくら

捨てたあなたが 悪いじゃないさ

とおさにゃならぬ 義理憎い

ゆうほ



いるかいなにか
「へ」のよな君が
いつのまにやら
「ほ」にかわる

ゆうほ



昔お城は 殿さま建てて

今は奥方 仕切る世さ

遊
帆

建てたお城で 殿さま沈み

奥方パーテイ 意気あがる

ゆうほ



使つかい捨すてだだと
言いつてつてつるる俺おれを
夜よだけだけ何なに故ゆゑに
またまたひひろろう

ゆうほ



夜になったら
パツクで武装

かかあ天下の
しろあるじ

ゆうほ



恋に火が付き

タンゴを踊り

振り回されりや

燃えさかる

ゆうほ



たててほしいの

おとこの面子

むすこもおとこ

たててやれ

ゆうほ



ボケが始まり
左右をみたら

何が悩みか

悩む歳

ゆうほ



昔いろはで
今あいうえお
色と愛から
おぼえるか
ゆうほ



古たくわんと 茶漬けの味で

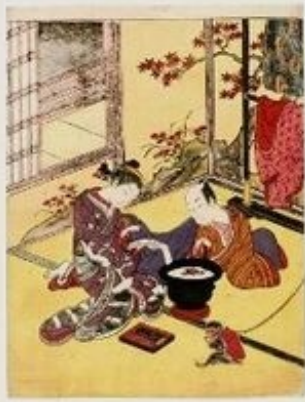
しみじみ見ている 春の月

さくら

茶漬けたくあん おまえの様な

毎日たべて 飽きぬ味

ゆうほ



お肌

しっとり

こころ

でき

ゆうほ



三味線横抱き つまひくように

さそう音色が 心打つ

遊 帆

ならぬ道ゆえ 切らねばならぬ

ばち(撥)があたって 糸切れる

ゆうほ



交わるほどに

湧くこの情け

かけて咲かそう

露の花

ゆうほ



いつまでひきずる あなたの影を
お酒に逃げてても ついてくる

さくら

一人になると 出てくる影は
やっぱりおなじ 寂しがり

ゆうほ



干され叩かれ
いぶされ
それ切られ
それで味出る
カツオぶし

ゆうほ

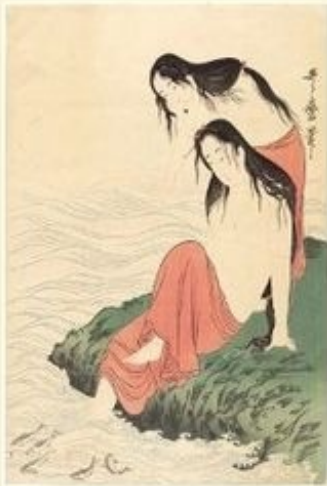


そのてんわたしは 強情だから
岩に張り付く あわびだよ

さくら

おまえアワビじゃ おれマテガイさ
穴にひそんで しおをまつ

ゆうほ



傘を開いた

松ぼっくりに

まつたけまだかと

したでまつ

ゆうほ



千年杉も

万年生きる

プル
ト冥王

勝てやせぬ

ゆうほ



想うお人が のれんをくぐりや

桜ひとひら 舞っている

さくら

吹雪夜桜

ふたりを隠す

桜は七日 恋つもる

ゆうほ



話し上手で

聞き上手だが

なんで聞けない

親説教

ゆうほ



黙っておいてく さくらの花に

想いを込める 春の夜

さくら

花は一時 人ひと盛り

思い遂げるか 春の夜

ゆうほ



うちの桜を

手折ったおまえ

あたし盗らぬか

花盗人

ゆうほ



売られたけんかは 買わねばならぬ
バカだねさつさと 逃げちやいな
けんかかっても うらみはかうな
浮世かりもの 夢舞台

ゆうほ



今ははやりの
ピンピンコロリ

なぜかさびしい

ひびきあり

ゆうほ



いつか逢えると信じて待った
何回さくらが散ったやら
さくら

たった一夜の恋する蝉も
長い年月 うちのなか
ゆうほ



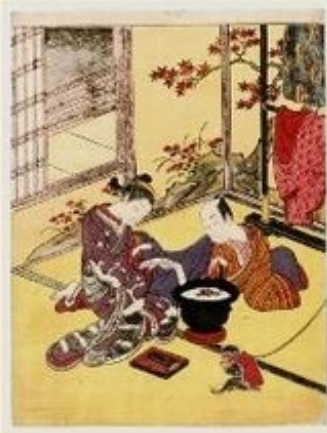
鼻毛伸ばして

言い寄るおまえ

鼻毛数えて

抜いてやる

ゆうほ



さくらの枝を たもとに隠し
そつと出て行く おぼろ月

さくら

たもとに隠した 桜の枝に
そつと恋文 つけた夜

ゆうほ



意地を通して
後ろを向いて
なだめ言葉は
まだかいな

ゆうほ



だ
け
ど
何
で
も
お
酒
に
逃
げ
る
お
ぼ
ろ
月

さ
く
ら

逃
げ
て
み
よ
う
と
酔
っ
て
は
み
て
も
迷
い
こ
む
の
は
袋
小
路

ゆ
う
ほ



花見弁当

筍づくし

思いのたけを

さしてみる

ゆうほ



相手は誰だと聞かないどくれ

鬼より怖い古女房

さくら

別れられない浮気の相手

女房にばれよとほのめかす

ゆうほ



魚包んだ

この新聞紙

開けば世間

アラばかり

ゆうほ



なんだよく見りや 勝手なことを

「浮気はその日の 出来心」

うちのウナギが お世話になると

浮気蒲焼 遠火焼く

さくら

ゆうほ



しやきんとりに

おわれるおまえ

いずれものどり

籠のどり

ゆうほ



酒も吞まずに女を口説く
あなたは相当ベテランね

さくら

口説けないのに手だしは速い
だせば逃げ足カールルイス

ゆうほ



あたしや素人

想定内が

エライお方にや

想定外

ゆうほ



満ちてくる潮 小さな胸に

溢れて流れる 夜の海

さくら

溢れる涙を とめるの無理さ

重荷溶かして 頬の川

ゆうほ



「ほ」の字の意味が

わからぬおひと

さとりひらけぬ

だるまさん

ゆうほ



こらえきれずに あなたの胸に
縫って泣いた 海の宿

さくら

言葉いらない 人肌恋し

胸に抱かれた 雛のよに

ゆうほ



注射いやだと

拒んだあの夜

今じゃやみつき

恋やまい

ゆうほ



求め尽くして また求めてる

愛の痛みが 増すばかり

さくら

いっそ谷底 一緒に落ちよ

あとは上しか ない浮世

ゆうほ



唄と云う字を

よくよく見れば

貝に口づけ

ならすよな

ゆうほ



人生訓など

壁にペタペタ貼っている

いろいろ書いて

さくら

壁に貼るときや

まじめにかいて
都合の良いのを
出すおまえ

ゆうほ



煙草臭いと

べランダだされ

寂しい夜の

冬螢

ゆうほ



大奥頼まれ 春画を描くが

殿も盗み見 いかりたつ

リーベ

牢屋暮らしの 浮世絵師でも

筆をしごいて かきつくす

ゆうほ



被災した夜に

オムスビ届き

噛めば人情

味がする

ゆうほ



地震お見舞い申し上げます。

ページ右の本の題の下の

著者 ゆうほ

をクリックすると下記4冊の本が表示されます。

ご面倒ながら各自ページにしおりをつけてください。

ログインしない場合は本の閲覧だけできます。

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part1 完結

<http://p.booklog.jp/book/18432>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part2 完結

<http://p.booklog.jp/book/18285>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part3 完結

<http://p.booklog.jp/book/20624>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part4 完結

<http://p.booklog.jp/book/21269>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part5 執筆中

<http://p.booklog.jp/book/22137>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸 文章編 執筆中

<http://p.booklog.jp/book/17722>

両本とも毎日更新連載中です。

コメント、評価(ログイン時可能)をも書き込みお願い致します。

ゆうほ 3月31日 ペナンの海の上より

ちょっと危ない色艶都々逸笑って許して！ Part5 短冊本

<http://p.booklog.jp/book/22137>

著者：ゆうほ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uoboat/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22137>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22137>